

課題着手の先延ばしと セルフ・ハンディキャッピング¹

松本 芳之

問 題

学生生活では、さまざまな学習場面で試験やレポートなどの課題を課される。それらの課題には締切が存在し、学生はそれに合わせて活動することを求められる。時間の厳守は、人々が近代社会で求められることの一つである。しかしながら、締切に対して余裕を持って課題に着手する者もいれば、締切間際になってから着手し始める者など、着手する時期は様ではない。そうした中で、課題に着手するのが遅れたために、準備が不十分なまま試験に臨んで失敗したり、期限までに間に合わせることができなかつたりするという学生もしばしば存在する。こうした課題着手の遅れは、先延ばし行動（procrastination）として取りあげられてきたものの一種である。先延ばし行動は、行すべき課題の着手や完成を遅らせること（Silvar & Sabini, 1981; Milgram, 1991）、先延ばしすると事態が悪化すると予想されるにもかかわらず、意図した活動コースを自発的に先延ばしすること（Steal, 2007）などと定義されてきた。これらの定義を踏まえると、学生が学習上の課題に着手する時期は、先延ばし行動を測る指標となると考えられる（増田, 2010）。

先延ばし行動の生起を説明する有力な理論枠組みの一つに、セルフ・ハンディキャッピングがある。セルフ・ハンディキャッピングとは、予想される失敗へのいいわけを作るために、自分の課題遂行に不利となる活動をすること（Jones & Berglas, 1978; Snyder & Smith, 1982）である。その目的は、自尊感情の維持にあり、失敗したときの言い訳となり得る行動を予め取ることで、失敗しても自尊感情が傷つかず、成功すれば自尊感情が高まることを期待する。たとえば、Rhodewalt, Saltzman, Wittmer (1984) は、セルフ・ハンディキャッピング傾向の高いスポーツ選手は、重要な大会前の練習量が少ないことを見いだした。それゆえ、セルフ・ハンディキャッピングは、行動によって状況に対応するのではなく、原因帰属を統制して課題遂行のもつ評価の意味を曖昧にしようとする試みであるとうことができる。これを踏まえ、Arkin & Baumgardner (1985) は、セルフ・ハンディキャッピングの形態を、内的・外的および主張的・獲得的の2次元で分類した。主張的とは言葉による訴えであるのに対し、獲得的とは実際に行動で行うことである。この枠組みに従えば、

具体的な行為や活動に関わる先延ばし行動は、内的・獲得的領域に属すると考えられる。先延ばし行動が予想される失敗への言い訳となり得るとすれば、セルフ・ハンディキャッピング傾向の高い人は、課題の着手時期を先延ばしすると予想される。実際、Ferrari (1991) は、先延ばし行動を取る人は、さまざまなセルフ・ハンディキャッピング活動を行うと述べた。

ただし、Lay, Knish & Zanatta (1992) は、セルフ・ハンディキャッピングと先延ばし行動はどちらも努力の遅延を図るものの、セルフ・ハンディキャッピングは先延ばし行動以外にもさまざまな方略を採用すると指摘している。たとえば、セルフ・ハンディキャッピングは自己に関する確な情報を避けようとする傾向と結びつく (Strube & Roemmele, 1985; Berzonsky, 1992)。その一つが困難な目標の選択である。Arkin & Baumgardner (1985) の分類枠組みでは、この行動は外的・獲得的領域に属する。失敗することが確実な高すぎる目標を意図して設定することは、また、達成動機の低さの特徴でもある (Spence & Helmreich, 1983)。すなわち、達成動機の高い人は、成功するか失敗するか分からない不確かな目標を設定するのに対し、達成動機の低い人は、成功することが確実な易しい目標か失敗することが確実な難しい目標を設定する傾向がある。それゆえ、課題着手時期が遅いことは、達成動機の低さとも結びつくと考えられる。実際、Lum (1960) は、達成動機が低い人は先延ばし行動を取ると指摘しており、Steel (2007) も、達成動機と先延ばし行動はかなり高い負の相関を示すと述べている。

以上の議論をまとめると、次の二つの仮説が導かれる。

仮説 1. セルフ・ハンディキャッピング傾向が高い人ほど、課題着手時期が遅い。

仮説 2. 達成動機が低い人ほど、課題着手時期が遅い。

本研究は、大学生を対象として、彼らが日常経験している学業課題について、これらの仮説を検証することを目的とする。

方 法

調査対象者

調査対象者は大学生 103 名 (男性 41 名, 女性 62 名), 平均年齢 20.4 歳 ($SD = 1.42$) であった。

質問紙の構成

質問紙は無記名とし、性別・年齢を記入するフェイスシートを除き、3 部構成であった。

1. 課題着手時期と課題への自信

設定した課題は、(1) 必修科目の期末レポートや試験勉強、(2) 得意科目の期末レポートや試験勉強、(3) 単位非参入科目の期末レポートや試験勉強、(4) 苦手科目の期末レポートや試験勉強、(5) グループ課題・グループレポート、(6) ゼミの発表、の 6 種類とした。それぞれの課題の課題着手時期について、締め切りのどの程度前から準備に着手するかを、1 (1 ヶ月以上前～3 週間前)、2 (3 週間前～2 週間前)、3 (2 週間前～1 週間前)、4 (1 週間前～3 日前)、5 (3 日前～当日) の

5段階評定で回答を求めた。したがって、数値が大きいほど着手時期が遅いことを表す。さらに、それぞれの課題を行うことに対する自信の程度を、1（全く自信がない）から、5（とても自信がある）までの5段階評定法で回答を求めた。

2. セルフ・ハンディキャッピング尺度

セルフ・ハンディキャッピング尺度には、沼崎・小口（1990）による「日本語版セルフ・ハンディキャッピングスケール」23項目（SH23）を用いた（表2参照）。それぞれの項目について、1（全く当てはまらない）から、6（非常によく当てはまる）までの6段階評定法で回答を求めた。

3. 達成動機尺度

達成動機測定尺度には、堀野（1987）による23項目を用いた（表3参照）。それぞれの項目について、1（全く当てはまらない）から、5（非常によく当てはまる）までの5段階評定法で回答を求めた。

結 果

課題着手時期と課題に対する自信

6種類の課題着手時期を因子分析（主因子法）し、分散説明率50.2%の1因子を得た。表1に因子負荷量を示した。次いで、尺度の信頼性を確認すると $\alpha = .89$ と高い信頼性が認められた。そこで、6項目の平均値を求めると $m = 3.71$ （ $SD = 0.87$ ）であった。さらに、課題着手時期の分布の様態を明確にするために、度数分布を図1に示した。選択肢は5段階であるため、分かりやすさを考慮して、区間数を9に設定した（ただし、最少区間と最大区間の幅は他の区間の半分とした）。図から明らかなように、最頻区間は4を中心とする区間であり、得点の分布はやや高い側に偏っていた。なお、平均値が5.0である回答者が10名存在した。同様に、課題に対する自信の程度について、すべての課題の平均値を求めたところ、 $m = 2.97$ （ $SD = 0.74$ ）と中程度であった。

表1 課題遂行行動の因子分析結果

| # | 項 目 | 因子 |
|---|---------------------|-----|
| 1 | 必修科目の期末レポートや試験勉強 | .93 |
| 4 | 苦手科目の期末レポートや試験勉強 | .84 |
| 2 | 得意科目の期末レポートや試験勉強 | .80 |
| 3 | 単位非参入科目の期末レポートや試験勉強 | .72 |
| 6 | ゼミの発表 | .63 |
| 5 | グループ課題・グループレポート | .62 |

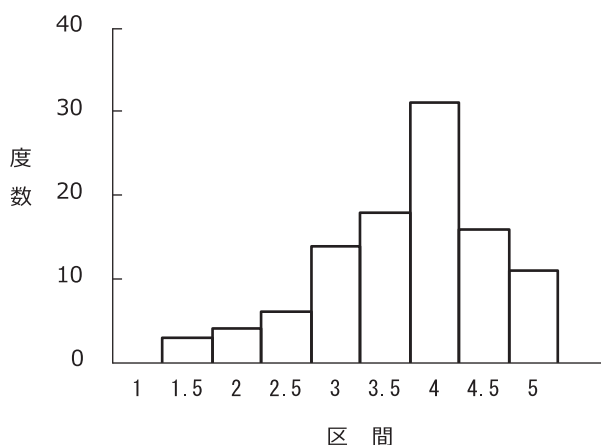


図1 課題着手時期の平均値の分布

セルフ・ハンディキャッピング尺度

セルフ・ハンディキャッピング尺度の23項目を因子分析（主因子法，プロマックス回転）し，スクリープロットを考慮した結果，4因子を得た。各項目の因子負荷量と因子間相関を表2に示した。これをもとに，因子負荷量の絶対値が4以上であることを基準として，それぞれの因子に属する項目を定めた。まず，5項目からなる因子1は主として逆転項目から構成されており，それに正項目である項目7（試験の前はとても不安になる）が同じ符号で結びついているものであった。逆転項目はいずれも十分準備をして課題に臨むという内容であるため，完全主義傾向を表すと解釈できる。4項目からなる因子2は，楽天性を表すと解釈できる。同様に，4項目からなる因子3は，状況に原因を求めつつ先延ばしするというものであり，責任転嫁を表すと解釈できる。3項目からなる因子4は，回避を表すと考えられる。表2から明らかなように，7個の項目はどの因子にも属さなかった。各因子の信頼性を確認するために α 係数を求め，表2に付記した。因子1から因子3は概ね十分な値であったものの，因子4は $\alpha = .52$ と不十分であった。そこで，以下の分析では因子4は除外する。次いで，因子1から因子3の項目平均値を求め，表4に示した。加えて，平均値の信頼区間推定を行い，評定段階の midpointである3と異なるか否かを確認し，表4に付記した。その結果，すべての因子が明らかに肯定側に偏っていた。とりわけ，責任転嫁は平均値が4に近く，調査対象者の多くが自分自身に，多少とも責任転嫁傾向があると認めているといえる。

表2 セルフ・ハンディキャップ尺度の因子分析結果

| # | 項 目 | 因子1 | 因子2 | 因子3 | 因子4 |
|-------------|---|------|------|------|------|
| 5 | どんなことでも、いつもベストを尽くす。* | .77 | .22 | .01 | -.13 |
| 13 | 何事もベストでのぞめないのはいやだ。* | .68 | -.01 | .22 | -.31 |
| 6 | 重要な活動などには、そのために必要な準備や経験が自分にあることを確かめてから参加する。* | .57 | .08 | .02 | .21 |
| 7 | 試験の前にはとても不安になる。 | .55 | -.12 | -.18 | .13 |
| 3 | 試験を受ける時、十分過ぎるほど準備をしてしまう。* | .52 | -.18 | -.37 | .17 |
| 10 | 生活のある場面での悩みや不安を、他の場面には持ち込まない。* | .20 | .76 | -.15 | .21 |
| 23 | 気分転換が早くできるほうである。* | .03 | .71 | .17 | .18 |
| 4 | 人より体調が悪いことが多い。 | -.06 | -.48 | -.10 | .32 |
| 22 | 非常に落ち込んでしまい、簡単なことさえなかなかできなくなってしまうことが時々ある。 | .28 | -.52 | .09 | -.03 |
| 1 | 失敗すると、すぐ状況のせいにしたくなる。 | .16 | -.07 | .72 | -.01 |
| 18 | 他人の期待にこたえられない時、理由づけしようとする。 | .05 | -.06 | .58 | .27 |
| 21 | 食べすぎたり飲みすぎたりすることがよくある。 | .00 | .02 | .55 | .04 |
| 2 | ぎりぎりまで物事を先にのばすほうである。 | -.33 | .18 | .47 | .06 |
| 9 | 人に負けたりうまくいかなかったりしても、余り傷つかないですむように、人とは張り合わないことにしている。 | .00 | .18 | -.08 | .61 |
| 12 | いつ手に入るかどうかわからない未来の大きな楽しみより現在の小さな楽しみの方を選ぶ。 | -.14 | -.07 | .35 | .46 |
| 11 | 自分はもっと努力すれば、もっとうまく出来るのと思う。 | .03 | .20 | .10 | .45 |
| 8 | 本を読もうとする時、物音や空想で集中できなくなりやすい。 | .04 | -.17 | .00 | .35 |
| 14 | いつの日か完璧になれたらと思う。 | .26 | -.03 | .20 | -.16 |
| 15 | 1日か2日の軽い病気なら、時には病気であることを楽しんでしまうこともある。 | -.11 | .18 | -.01 | .14 |
| 16 | 感情に邪魔されなければ、もっとうまくできるのと思う。 | .24 | -.35 | .20 | .36 |
| 17 | 何かがうまくできない時、他のことはうまくできると自分を元気づけることがよくある。 | .07 | .10 | .15 | .36 |
| 19 | スポーツやテストをする時、運が悪いほうだと思う。 | .34 | -.17 | .18 | .12 |
| 20 | 重要なことがある前には、明瞭に考えたり、適切なことをする能力を妨げるようなものは飲まない。* | .30 | -.01 | .00 | .23 |
| 因子間相関 | | 因子1 | .22 | .04 | .35 |
| | | 因子2 | | .42 | .10 |
| | | 因子3 | | | .07 |
| α 係数 | | .74 | .68 | .66 | .52 |

*逆転項目

達成動機尺度

同様に、達成動機尺度の23項目を因子分析（主因子法、プロマックス回転）した結果、2因子を得た。各項目の因子負荷量と因子間相関を表3に示した。これをもとに、因子負荷量の絶対値が.4以上であることを基準としてそれぞれの因子に属する項目を定めた。得られた2因子は堀野（1987）の分析結果と概ね対応するため、因子1は自己充実、因子2は競争と解釈できる。次いで、各因子の信頼性を確認するために α 係数を求め、表3に付記した。2因子とも十分な信頼性が認められたので、各因子について因子項目の平均値を求め、表4に示した。また、各因子の平均値について信頼区間推定を行い、評定段階の midpoint である3と異なるか否かを確認したところ、いずれの因子も明

らかに肯定側に偏っており、全体として達成動機は高いといえる。とりわけ、因子1の平均値は4に近く、調査対象者の多くは、自らの設定した目標に向けて努力しようと考えていることが示唆される。

表3 達成動機尺度の因子分析結果

| # | 項 目 | 因子 1 | 因子 2 |
|-------------|-----------------------------------|------|------|
| 10 | 何でも手がけたことには最善を尽くしたい。 | .67 | .02 |
| 12 | 何か小さなことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う。 | .64 | .14 |
| 8 | みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい。 | .62 | .2 |
| 16 | いろいろなことを学んで自分を深めたい。 | .62 | -.08 |
| 1 | いつも何か目標を持ってしていきたい。 | .60 | .07 |
| 21 | 難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う。 | .58 | -.05 |
| 6 | ちょっとした工夫をすることが好きだ。 | .56 | .14 |
| 3 | 決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい。 | .54 | .12 |
| 23 | こういうことがしたいなあと考えたとわくわくする。 | .50 | .09 |
| 4 | 人と競走するより、人と比べることができないことで自分をいかしたい。 | .46 | -.23 |
| 20 | 社会の高い地位を目指すことは重要だと思う。 | -.13 | .70 |
| 18 | 成功することは、名誉や地位を得ることだ。 | -.26 | .69 |
| 5 | 他人と競走して勝つとうれしい。 | .11 | .67 |
| 22 | 世に出て成功したいと強く願っている。 | .10 | .62 |
| 11 | どうしても私は人より優れていたいと思う。 | .15 | .60 |
| 17 | 就職する会社は、社会で高く評価されるところを選びたい。 | .12 | .55 |
| 9 | 競走相手に負けるのは悔しい。 | .07 | .53 |
| 13 | 勉強や仕事で努力するのは、他の人に負けないためだ。 | .04 | .47 |
| 2 | ものごとは他人よりうまくやりたい。 | .26 | .45 |
| 7 | 人に勝つことより、自分なりに一生懸命やるのが大事だと思う。 | .53 | -.53 |
| 14 | 結果は気にしないで、何かを一生懸命やってみたい。 | .39 | -.20 |
| 15 | 今の社会では、強いものが出世し、勝ち抜くものだ。 | -.05 | .28 |
| 19 | 今日一日何をしようか考えることは楽しい。 | .39 | .04 |
| 因子間相関 | | | .20 |
| α 係数 | | .84 | .83 |

表4 因子の平均値

| 因子 | 平均 | SD | t (102) |
|----------------|------|------|----------|
| セルフ・ハンディキャッピング | | | |
| 完全主義 | 3.42 | 0.81 | 5.28*** |
| 楽天性 | 3.73 | 1.02 | 7.28*** |
| 責任転嫁 | 3.91 | 0.87 | 10.59*** |
| 達成動機 | | | |
| 自己充実 | 3.91 | 0.59 | 15.72*** |
| 競争 | 3.46 | 0.65 | 7.21*** |

*** $p < .001$

重回帰分析

次いで、課題着手時期と課題に対する自信、および各因子の相関係数を求め、表5に示した。課題着手時期と課題に対する自信の間には明確な関係が求められなかった。また、課題着手時期とセルフ・ハンディキャッピング尺度、および達成動機尺度の関係を検討するために、尺度ごとに課題着手時期の得点を目的変数、各因子の得点を説明変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を行った結果、セルフ・ハンディキャッピング尺度の完全主義と責任転嫁を説明変数とする重回帰式が得られた。重回帰係数 R は.47、説明率 R^2 は.22であった。表5にそれぞれの説明変数への重みを示した。表5から、完全主義傾向が低いほど、かつ責任転嫁傾向が高いほど、課題着手時期は遅くなると解釈することができる。しかしながら、達成動機尺度については、2因子とも有意な関係が存在しなかった。

表5 課題着手時期、課題への自信、セルフ・ハンディキャッピング、達成動機の相関係数（ $n = 103$ ）

| | 課題着手 時期 | 課題への 自信 | セルフ・ハンディキャッピング | | | 達成動機 | |
|-----------|------------|------------|----------------|------|-------|-------|-------|
| | | | 完全主義 | 楽天性 | 責任転嫁 | 自己充実 | 競争 |
| 課題着手時期 | 1 | -.17 | -.42** | .19 | .29** | -.10 | .06 |
| 自信 | -.17 | 1 | .27** | .03 | -.07 | .22* | .05 |
| 完全主義 | -.42** | .27** | 1 | -.18 | -.21* | .40** | .10 |
| 楽天性 | .19 | .03 | -.18 | 1 | .05 | .12 | .13 |
| 責任転嫁 | .29** | -.07 | -.21* | .05 | 1 | .10 | .24* |
| 自己充實的達成動機 | -.10 | .22* | .40** | .12 | .10 | 1 | .28** |
| 競争的達成動機 | .06 | .05 | .10 | .13 | .24* | .28** | 1 |

* $p < .05$, ** $p < .01$

表6 セルフ・ハンディキャッピング尺度を説明変数、
課題着手時期を目的変数とする重回帰分析の結果

| 説明変数 | β | 標準化 β | t | p |
|------|---------|-------------|-------|------|
| 完全主義 | -.404 | -.376 | -4.16 | .000 |
| 責任転嫁 | .207 | .208 | 2.31 | .023 |

考 察

本研究は、大学生を対象に、試験やレポートなどの課題に着手する時期に焦点を当て、それがセルフ・ハンディキャッピング傾向および達成動機とどのように関係しているかを検討したものである。

最初に、課題着手時期について検討する。6種類の課題着手時期を因子分析した結果、一貫性のある1因子解が得られた。したがって、早く着手する人はどのような課題でも早く、逆に遅く着手する人はどのような課題でも遅く着手する傾向があるといえる。平均すると、学習上求められるさ

まざまな課題に着手するのは、締切のおよそ1週間前であった。ただし、調査対象者の約1割は、科目や課題の種類を問わず、選択肢の最短期間である3日前以降に着手することが確認された。この点も含め、図1の分布の様態を考慮すると、短い時間区間をより細かくするとともに、長い区間を圧縮した選択肢を設定の方がより適切であるかもしれない。また、課題に対する自信と課題着手時期は無関係であった。自信があるから着手を遅くする、ないから早めるといった傾向はみられないのである。

これを踏まえ、仮説の検証を行う。議論の都合上、仮説2を最初に取り上げる。仮説2は、課題着手時期と達成動機の間を負の相関を予測したものである。しかしながら、達成動機尺度の2因子は、いずれも課題着手時期と結びつきがなかった。したがって、仮説2は支持されなかった。この結果は、Lum (1960)、谷口・鈴木・安福 (2013) の知見と異なる。考えられる理由は、第1に、本研究の調査対象者の達成動機が概して高かったことである。とりわけ、自己充実因子は高い水準にあった。自己充実因子の平均値の分布を詳しくみても、下位25%の値が3.6、下位10%の値でも3.2であった。このため、セルフ・ハンディキャッピングと結びつくような低い水準の者がほとんど含まれていなかったことが考えられる。第2に、従来の指標と本研究が用いた指標の違いである。先延ばし行動を扱った研究の多くは、さまざまな事柄に関する先延ばし傾向を質問紙で問うかたちであった。これに対し、課題着手時期という本研究の指標は、回想とはいえ行動指標に近いものである。したがって、特定の領域における行動を取りあげたものといわねばならない。これらの詳細の説明は今後の検討課題である。

次に、仮説1は、課題着手時期とセルフ・ハンディキャッピング傾向の間に正の相関を予測したものである。この仮説は、セルフ・ハンディキャッピング理論に基づき、失敗して自尊感情が傷つくことを恐れて課題行動の着手を遅らせるという考え方に立つものである。まず、完全主義因子は課題着手時期とかなり高い負の相関を示した。この因子は主に逆転項目から構成されているので、一見、仮説を支持するようにみえる。しかしながら、完全主義因子は、4項目の逆転項目と1項目の正項目が同じ符号の因子負荷量で混在するものであった。具体的には、完全主義傾向に不安項目が結びついたものである。セルフ・ハンディキャッピングの考え方に立つと、不安は消極的な自己防衛の姿勢と結びつかねばならない。しかし、完全主義因子に含まれる不安は回避行動ではなく、目標達成に向けた積極的で能動的な対応行動と結びついている。それゆえ、この項目は、不適応行動と結びつく心理的不安ではなく、むしろ、高水準の達成を企図することに伴う危機意識を表していると理解すべきであろう。不安は必ずしも否定的な影響のみを及ぼすわけではない。過度な不安が否定的な影響を及ぼす例は枚挙にいとまがない。しかし、現状に対して危機意識を抱くことが的確な課題行動を動機づける要件であることは、Janis & Mann (1977) が強調したところである。約言すれば、セルフ・ハンディキャッピングは、失敗することへの不安、回避、着手時期の先延ばしというつながりを想定するのに対し、本研究の完全主義は、達成に向けた危機意識、積極性、着手の早期化というつながりを示唆しているのである。このことは、完全主義と達成動機の自己充実が

かなり高い正の相関を示していることから示唆される。完全主義と自己充実は、課題への自信とも正の相関を示した。しかしながら、既にみたように、課題着手時期と自己充実には相関がなかった。それゆえ、課題着手時期を左右するのは、危機意識を伴う完全主義傾向という特定の側面であると考えられるのである。

ここで、完全主義の得点が低い側に注目すると、得点の低さは非完全主義というよりも、危機意識が欠落した妥協的傾向を表しているとみることができる。何とかなるといった根拠なき思い込みから課題の着手を先延ばしして、達成すべき水準に対して妥協することである。その結果、的確な対処行動を取った場合よりも、失敗の可能性は増大すると考えられる。危機意識を抱かずに現実への能動的な対応をせず、課題を先送りするというかたちは、Janis & Mann (1977) のいう葛藤なしの継続 (Unconflicted Inertia) にほかならない。同じように課題着手時期が遅くなるとしても、このような行動傾向はセルフ・ハンディキャッピングとは異なる機制に基づいているというべきであろう。したがって、完全主義因子は、セルフ・ハンディキャッピング傾向を反映したものとはいえない内容であった。以上の検討から、完全主義因子については、仮説 1 は支持されなかったと結論することができる。

これに対し、セルフ・ハンディキャッピングの概念が意味する行動や弁解への志向によって構成されている責任転嫁因子については、課題着手時期と負の相関を示したことから、仮説 1 が支持されたとえる。ただし、本研究は相関研究であり、2 変量間の関係は必ずしもセルフ・ハンディキャッピング理論が想定している方向に固定されるわけではない。完全主義因子の結果を踏まえるならば、セルフ・ハンディキャッピング理論の想定とは異なる説明が考えられる。セルフ・ハンディキャッピングは、自尊感情を維持するために課題着手時期を遅らせ、失敗の口実とすると想定する。現実への能動的な対応行動の代わりに、感情反応を統制する行動を選択するのである。しかしながら、完全主義因子は、危機意識を抱かずに妥協的に着手を遅らせる結果、課題に失敗する可能性が高まることを示唆している。もし実際に失敗した場合には、なぜ不十分な対応しかできなかったかについて、社会的な説明や弁明が必要となるはずである。このとき、責任転嫁傾向が含意する主張や行動を取ることが考えられる。そうとすると、責任転嫁因子が示していることは、自尊感情を維持するために自己に不利な状況を作り出した結果というよりも、失敗した事態に事後的に対応した結果である可能性が高いことになる。こうした事後対応も、自尊感情の維持を目的とするものであろう。しかし、このような機制はセルフ・ハンディキャッピングとはいえない。完全主義と責任転嫁の相関は有意でないものの負の方向にあることから、責任転嫁因子の結果についても、どの程度仮説を支持するのかは必ずしも明確でないといわねばならない。

ところで、セルフ・ハンディキャッピング尺度から、課題着手時期と強く結びついた完全主義のような因子が得られた理由の一つは、測定の変脈の影響が考えられる。他の多くの研究と同様、本研究も複数の概念に関係した項目を一括して測定している。その場合、調査対象者は、質問紙が取り上げている現象に照らして項目の意味を解釈していると考えねばならない。本研究の質問紙で

は、最初に課題着手時期について回答し、その後セルフ・ハンディキャッピング傾向と達成動機に回答することを求めている。それゆえ、課題着手時期が測定上の文脈を提供し、調査対象者はそれをもとに、セルフ・ハンディキャッピング傾向と達成動機の質問に回答している可能性がある。こうした問題を避けるには、現象の測定と関連概念の測定の時期をずらし、たとえば2週間程度間隔を空けるなどの方法が考えられる。ただし、達成動機は先行研究と類似した因子構造が得られていることから、課題着手時期という文脈の影響を受けにくいといえる。これらは今後の検討課題である。

本論は、自尊感情を維持するために課題の着手を遅らせ、それを弁明の口実にするというセルフ・ハンディキャッピング行動の存在を否定するわけではない。しかしながら、本研究が着目した大学生の課題活動における着手時期の遅れの多くは、セルフ・ハンディキャッピングよりも、危機意識が欠落した妥協的行動の結果であり、責任転嫁は、その後生じる社会的弁明の要請に事後的に対応したものであることが考えられる。こうした理解は Rachlin (2000) や増田 (2010) の知見と一致するといえよう。

[注]

- 1 本研究の実施に当たっては早稲田大学教育学部上領香菜子氏の協力を得た。

[引用文献]

- Arkin, R. M., & Baumgardner, A. H. 1985 *Self-handicapping*. In J. H. Harvey & G. Weary (Eds.), *Attribution: Basic issues and applications*. New York: Academic Press.
- Berzonsky, M. D. 1992 Identity style and coping strategies. *Journal of Personality*, 60, 771-788.
- Ferrari, J. R. 1991 Self-handicapping by procrastinators: Protecting self-esteem, social-esteem, or both? *Journal of Research in Personality*, 25, 245-261.
- 堀野緑・森和代 1991 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究, 39, 308-315.
- Janis, I. L., and Mann, L. 1977 *Decision making: A psychological analysis of conflict, choice, and commitment*. New York: Free Press.
- Jones, E. E., & Berglas, S. 1978 Control of attributions about the self through self-handicapping strategies: The appeal of alcohol and the role of underachievement. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 4, 200-206.
- Lay, C. H., Knish, S., & Zanatta, R. 1992 Self-handicappers and procrastinators: A comparison of their practice behavior prior to an evaluation. *Journal of Research in Personality*, 26, 242-257.
- Lum, M. K. M. 1960 A comparison of under- and overachieving female college students. *Journal of Educational Psychology*, 51, 109-115.
- 増田尚史 2010 先延ばしに関する心理学的検討—個人特性と客観的・主観的遅延の関係— 広島修大論集, 51, 59-70.
- Milgram, N. A. 1991 *Procrastination*. In R. Dulbecco (Ed.), *Encyclopedia of human biology*, vol. 6. New York: Academic Press.
- 沼崎誠・小口孝司 1990 大学生のセルフ・ハンディキャッピングの2次元 社会心理学研究, 5, 42-49.
- Rachlin, H. 2000 *The science of self-control*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Rhodewalt, F., Saltzman, A. T., & Wittmer, J. 1984 Self-handicapping among competitive athletes: The role of practice in self-esteem protection. *Basic and Applied Social Psychology*, 5, 197-210.

- Silver, M., & Sabini, J. 1981 Procrastinating. *Journal for the Theory of Social Behavior*, 11, 207-221.
- Snyder, C. R., & Smith, T. W. 1982 *Symptoms as self-handicapping strategies: The virtues of old wine in a new bottle*. In G. Weary & H. L. Mire's (Eds.), *Integrations of clinical and social psychology*. New York: Oxford University Press.
- Spence, J. T., & Helmreich, R. L. 1983 *Achievement-related motives and behavior*. In J. T. Spence (Ed.), *Achievement and achievement motives: Psychological and sociological approaches*. San Francisco: Freeman.
- Steel, P. 2007 The Nature of Procrastination: A Meta-Analytic and Theoretical Review of Quintessential Self-Regulatory Failure. *Psychological Bulletin*, 133, 65-94.
- Strube, NI. J., & Roemmele, L. A. 1985 Self-evaluative task choice. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 981-993.
- 谷口篤・鈴木眞雄・安福幸代 2013 先延ばし行動と達成動機, 自己効力感, 及び性差の関係 名古屋学院大学論集, 社会科学篇, 49, 1-12.